

都留文科大学電子紀要の著作権について

都留文科大学電子紀要のすべては著作権法及び国際条約によって保護されています。

著作権者

- 「都留文科大学研究紀要」は都留文科大学が発行した論文集です。
- 論文の著作権は各論文の著者が保有します。
- 紀要本文に関して附属図書館は何ら著作権をもっておりません。

論文の引用について

- 論文を引用するときは、著作権法に基づく引用の目的・形式で行ってください。

著作権、その他詳細のお問い合わせは

都留文科大学附属図書館
住所: 402山梨県都留市田原三丁目8番1号
電話: 0554-43-4341(代)
FAX: 0554-43-9844
E-Mail: library@tsuru.ac.jp

までお願いします。

[電子紀要トップへ](#)

「エリザベス朝小説」について

On “ the Elizabethan Novels ”

依 藤 道 夫

YORIFUJI Michio

Summary

This paper is on “ the Elizabethan novels ” which very vividly reflect the vital world of the age of Elizabeth I and the spirit and art of the Renaissance of that period. The romances and other prose writings by “ the University Wits ” like John Lyly, Robert Greene, Thomas Lodge and Thomas Nash, etc., were, in a sense, forefathers of the new novels of the 18th century, though they were probably very indirect ones. These prose writers first influenced by Lyly’s “ Euphuism ” were greatly active in the then literary circles and against William Shakespeare who gradually came to distinguish himself in the world of Elizabethan drama.

Thomas Deloney and Thomas Dekker as well as Greene and Nash were not a little realistic prose writers.

Thus all the writers of pamphlets, romances and other realistic writings of those days contributed a great deal to the development of the English prose fictions.

1 .

エリザベス朝期の散文界は、演劇の華やかさの蔭にありながらも、大幅な進展を遂げた。なかでも、散文物語はこの時代に至って初めて脚光を浴びるようになった。そして今では、「エリザベス朝小説」(the Elizabethan novels) とか、すぐ後の時代の同分野の作品群を指す「ジェームズ一世朝小説」(the Jacobean novels) とかの呼称さえ用いられている。

だが、むしろこれらの時代の「小説」(と一応呼んでおくとしても)は、現在に言う「小説 (novels)」と同質のものではない。それは要するに、近代小説ではないのである。従って、当時の「小説」は、あくまでまだ「前時代的」類のものであり、それを後世の近代小説の直接的源流と見るには無理がある。そういう性質のものなのである。つまり、虚構の物語という点では、ともに同じでも、当時の小説は近代小説の持つある種の「厳格な」条件を全く満たしていなかったのである。近代小説の有する斬新な特質をまだまだ発見、獲得していないということである。そしてそれは、当時の「小説」自体のせいと言うよりは、むしろ時代的、社会的、歴史的制約によるものだったと言う他はない。

が、それにもかかわらず「エリザベス朝小説」は、目覚ましい展開を見せた。今日に残る傑作もいろいろ生まれたのである。それらはいずれも、華やかな劇作品や詩作品と同様に、活力に満ちた当時の社会、世相を、そしてルネッサンスの精神を反映したものである。更に、そのうちのあるものは、中世ロマンスとは異質の、むしろ後の時代を予兆するような要素を秘めていた。

こうした「エリザベス朝小説」を中世口マンスと近代小説の間の過渡期の存在、両者をつなぐものとする見方も生じ得る。こういう見方はそれこそウォルター・アレン (Walter Allen) の言う自動車の歴史を述べようとして、前の3分の1の部分を牛車の発展に当てるといったとえに類するであろう。恐らくそうであろうが、それにもかかわらず、この「エリザベス朝小説」をジョン・バンヤン (John Bunyan, 1628-88) やダニエル・デフォー (Daniel Defoe, 1660?-1731) 以後の近代小説と全く無縁のものとして退け去るのにも大変な抵抗感を覚えざるを得ないのは当然である。歴史は繰り返してはしても、どこか途中でぶつ切り切れてしまっているということはあるからである。それになによりも、同「エ小説」の勢いがその当時えらく振った。それは決して大規模なものではなかったにせよ、一つの活発な作家群、「世代」や「層」とさえ言えるものを形成しているのである。そしてそれが当時のルネッサンス文学の一翼を担ったことも明らかである。

更には、そうした作家の代表的一人トマス・ナッシュ (Thomas Nash(e), 1567-1601) と20世紀のジェームズ・ジョイス (James Joyce, 1882-1941) との影響関係といった事例もある。ナッシュと後の英国ピカレスク小説 (Picaresque novel) の発展とは切り離せない。そのピカレスク系小説は、英国小説の主流にも食い込んでいる。また、トマス・デローネイ (Thomas Deloney, 1543?-1600?) の写実的な市井の描写ぶりなどにも、後の近代小説の特色を思わせるところがあるのである。

このようにして、「エリザベス朝小説」は、決して近代小説の直接的源流とは言えないけれども、少なくともその起源に相当する、或いは近代小説が発生するために必要な歴史的基盤の重要な一部分にはなり得た、と考えられるだろう。近年、「エリザベス朝小説」の復権がいろいろ取り沙汰されている模様だが、ナッシュとジョイスの関係にも見るように、それが将来の小説にどのような影響を及ぼすか知れない、そういう可能性も全く否定し去ることは誰にも出来ないのである。

2 .

本論では、他に定着した最適の呼称があるわけでもないのに、引き続き「エリザベス朝小説」という語を用いてゆくが、この分野の主たる担い手は「大学才人」(University Wits) と呼ばれた作家たちであった。これは当時のオックスフォード大学 (Oxford University) やケンブリッジ大学 (Cambridge University) 出身の一群のインテリ劇作家たちのことであつた。彼らは、演劇の隆盛を背景として劇作をやつた。

しかしながら、この方面では、出身がどこの馬の骨とも分からないウィリアム・シェークスピア (William Shakespeare, 1564-1616) の輝きが、余りにもまぶし過ぎた。彼ら大学才人たちの多くは、かかる事態をうとましく思いながらも、如何ともなし難く、ロバート・グリーンのように、ただ遠くから悪態をつくだけであつた。そうした彼らの強みは、やはりインテリとしてのそれ、つまり学識であつた。それを活用しつつ、彼らは、むしろ、散文物語作家としての名を歴史に刻み込んだのである。

こうした作家群の中で早目に成功を収めて、仲間の他作家たちに少なからぬ影響を与えたのが宮廷作家ジョン・リリー (John Lyly, 1554?-1606) である。オックスフォード、ケンブリッジの両方に学び、弁護士になった人物である。彼の代表作『ユーフェーズ、機知の分析』(Euphues, the Anatomy of Wit, 1579) は教訓的口マンスだが、内容それ自体によって

よりも、その華麗な、飾り立てた文体によって有名になった。持てる知識を駆使して故事を盛り込み、諺をしばしば挟み、頭韻や対句、比喩を多用した派手な文体である。それは“euphuism”(誇飾体、美辞麗句の意)という普通名詞を生み出しさえした。普通名詞さえ生ぜしめたというのは、実際、大変な影響ぶりである。

なお、ユーフェーズというのはアテネ青年の主人公の名前である。大した筋のないこの物語の素材は、当時トマス・ノース(Sir Thomas North, 1523-1601?)の訳したスペイン人の作品から採られていると言われる。

『ユーフェーズ』が評判を取ったために、リリーは早速続編を書いた。『ユーフェーズと彼の英国』(*Euphuus and his England*, 1580)である。次の文章はその中の一節である。

では、ファイダスよ、私はこの件で、私の名誉を決定することになるあなたの誠意に訴えます。あなたは私が私の古い友人に気紛れであれ、新しい友人に忠実であれ、と言うのですか。あなたは知らないのですね。アーモンドの木が古くなると沢山の実をつけるように、愛情も年月がたつと大いなる信義をそなえるものなのです。ブドウの木においてと同様に、愛情においても起こることなのです。というのは、若々しいブドウの木は沢山のブドウ酒をつくり出すのですが、古い木は極上のブドウ酒を産み出すのです。それゆえ、やさしい愛情は花盛りを見せてくれるのですが、試験ずみの信頼ある愛情は、最も甘美な果汁を産み出してくれるのです。

しかしながら、あなたの企てに勇気を与えるためではないのですが、これだけは言いましょ。私は、今までのほかの誰人(私のシルサスを唯一の例外として)の場合とも同じくあなたとの交わりに大いなる喜びを抱いたのです。その結果、私がしばしば質問してあなたに話すようにしむけるか、或いは言い争いによってあなたを怒らせ、かんしゃくを起こさせたりするかしたのですが、私はあなたの中に私の願いに応え得る才知を認めたのです。その願いを私は語ることによってすっかり行えると思ったのですが。しかし、あなたが見目よいアレグザンダーで、私のシルサスがセルシテスで、或いはあなたがユリシーズで彼がマイダス、あなたがクリョーサスで彼がコドルスだったとしても、私は彼があなたを自分のものとするを見過ごさないでしょう。たとえそれによってあなたの命を延ばし、或いは私の命をもたせるとしても、見過ごさないでしょう。真の愛情が私の心にしっかりと根を張ってしまったので、それは掘れば掘るほど一層深く成長し、何度も切れば切るほど、出血もいよいよ少なくなるのです。そして、それは、積まれれば積まれるほど、益々よいものを携えるというわけなのです。

ジョン・リリー『ユーフェーズと彼の英国』(筆者訳)

Then Fidus I appeal in this case to thy honesty which shall determine of mine honour. Wouldest thou have me inconstant to my old friend, and faithful to a new? Knowest thou not that as the almond tree beareth most fruit when he is old, so love hath greatest faith when it groweth in age. It falleth out in love as it doth in vines, for the young vines bring the most wine, but the old the best: So tender love maketh great show of blossoms, but tried love bringeth forth sweetest juice.

And yet I will say thus much, not to add courage to thy attempts, that I have taken as

great delight in thy company as ever I did in any s (my Thirsus only excepted) which was the cause that oftentimes I would either by questions move thee to talk, or by quarrels incense thee to choler, perceiving in thee a wit answerable to my desire, which I thought throughly to wet by some discourse. But wert thou in comeliness Alexander, and my Thirsus, Thersites, wert thou Ulysses, he Midas, thou Græsus, he Codrus, I would not forsake him to have thee: no not if I might thereby prolong thy life, or save mine own, so fast a root hath true love taken in my heart, that the more it is digged at the deeper it groweth, the oftener it is cut the less it bleedeth, and the more it is loaden the better it beareth.

J. Lyly, *Euphues and his England*

「ユーフェーズ的^{ジャーゴン}たわごと」と言われるほどに華麗に凝ったリリーのユニークで目新しい文体は、彼の個性と時代の両方を反映したものであったのであろうが、それが当時の文人たち、彼の同僚や後輩たちに与えた影響は強烈だったらしい。この派手な文体の模倣者が多く出た。その中には、ロバート・グリーン (Robert Greene, 1558頃-92)、トマス・ロッジ (Thomas Lodge, 1558?-1625)、トマス・ナッシュら錚錚たる作家たちがいたわけである。グリーンは『ユーフェーズ』をまねて『マミーリア』 (*Mamelia*, 1583) を書くことから彼の創作業を始めたし、ロッジも『ユーフェーズ』を模して代表作『ロザリンド、ユーフェーズの黄金の遺産』 (*Rosalynde, Euphues Golden Legacie*, 1590) をものしている。もって目覚ましい先覚者ぶりが分かろうというものである。そのリリーは、フィリップ2世を諷刺した『マイダス』 (*Midas*, 1592) などの劇も書いている。彼は最初の散文劇作家でもあった。

ともかく、リリーは、『アーケイディア』 (*Arcadia*, 1590。但し執筆したのは1580年) の作者フィリップ・シドニー卿 (Sir Philip Sidney, 1554-86) とともにこの時代の散文ロマンスの草分けとなり、そのありようをつとに世に示したと言える。若くして戦死したが、才能豊かな貴族詩人だったシドニーは、『アーケイディア』を詩美あふれる牧歌的ロマンスの典型としたが、リリーは主にその特異なる文体によってこの分野の伝統に貢献した。

3 .

ロバート・グリーンは、大学才人たちの中で最も波乱に富んだ人生を送った個性の強い男である。ノーフォーク (Norfolk) 州のノーウィッチ (Norwich) 生まれであり、ケンブリッジ大学に給費生として入っている。後年、オックスフォードにも学んでいる。ケンブリッジの学友にトマス・ナッシュ^{ほうらつ}がいた。

学生時代に派手で^{ほうらつ}放埒な気風を身につけたグリーンは、ケンブリッジ卒業後、欧州旅行に出ている。後にナッシュがその代表作『悲運の旅人』 (*The Unfortunate Traveller, or, the Life of Jacke Wilton*, 1594) の中で鮮烈に描いたようなイタリア社会の道徳的に乱れ切った華美な雰囲気は、彼グリーンを一層放縦な人物にするのに「寄与」したに違いない。彼はやがてロンドンに出て、文筆の世界に身を投ずる。最初の作品が既述の『ユーフェーズ』風の『マミーリヤ』である。他にもこの手の作品を数作書いている。

グリーンは、結婚、そして離婚の後『パンドスト王』 (*Pandosto, or Dorastus and*

Fawnia, 1588) 『メナフォン』(Menaphon, 1589) などの代表的ロマンス、また『アルフォンサス』(Alphonsus, 1599) 『スコットランド王ジェームズ4世』などの劇作品、更には、『兎取り読本』シリーズ(人をたぶらかして金を奪う方法などを説いている)や最晩年のよく知られた告白文『多大な後悔で購^{あがな}われたわずかな知恵』(A Groatworth of Wit Bought with a Million of Repentance, 1592)などを相次いで書き上げた。とりわけ、『兎取り読本』シリーズの如き裏街道を暴露するようなパンフレットを沢山書いたのは、のんだくれの彼が悪漢や悪党の類と交わした経験によっている。そうした暗黒街の知識を書いて、悪い連中の汚いやり口を人々に教え、それによって彼らを守ろうとしたものだと言っている。

彼は短い人生のうちに38作も書いた作家だったが、その中でも代表作と目される『バンドスト王』は、当時流行の牧歌的ロマンスの傑作である。グリーンはこの種のロマンスは、ジョン・リリーやフィリップ・シドニーの影響下に始まったものである。この『バンドスト王』が今日に有名なのは、作中に示された彼の作家的力量もさることながら、やはり巨匠シェークスピアが『冬の夜話』(Winter's Tale, 1610-11)の素材を本作から得たことによると言える。但し、筋はほぼ同じでも、シェークスピアのほうは登場人物名をみな変えている。また、バンドストに当たるレオンティーズ(Leontes)はバンドストと違って死なない、などといった部分的相違がある。『バンドスト王』のドラスタス(Drastus)、フォーニア(Fawnia)は、それぞれシェークスピアのフロリゼル(Florizel)、ペル(パー)ディタ(Perdita)に相当する。グリーンの名声を高めた「恋愛もの」ヒロインたちは初期シェークスピアのそれらを思わせると言われるが、『ヴェローナの二人の紳士』(The Two Gentlemen of Verona, 1594?-5作, 1623出版)も、グリーンの影響を受けていると考えられている。

なお、『バンドスト王』はフランスでも劇化、上演されたという(1631年)。

シェークスピアは、その他にもトマス・ロッジの『ロザリンド』からも、更には当時の歴史家、年代記作者たちの作品からもいろいろと材を得ているが、得に大学才人たちの中には成り上がり者の彼シェークスピアに嫉妬心から反感を持つものが多かったところから、たとえばグリーンの次のような悪口を買ってしまった。『多大な後悔で購^{あがな}われたわずかな知恵』の中の文章である。

ある新参者がいる。やつは役者の皮にくるんだ虎の心を持つ男で、他人の羽毛で飾り立てた成り上がりのカラスだ。やつは君らの一番優秀な男と同じように自由詩を次々と生み出せるとうぬぼれている。その上、実に何でも屋であるから、己れが我々の国で唯一人のシェイク・シーン(舞台を震撼させる者)だと自負している。

ロバート・グリーン 『多大な後悔で購^{あがな}われたわずかな知恵』

...: for there is an upstart crow beautified with our feathers, that with his *tiger's heart wrapped in a player's hide*, supposes he is as well able to bombast out a blank verse as the best of you; and being an absolute *Johannes Factotum*, is in his own conceit the only *Shake-scene* in a country. ...

R. Greene, *A Groatworth of Wit Bought with a Million of Repentance*

天下の大文豪も「成り上がりのカラス」(an upstart crow) とののしられ、「シェイク・シーン」(Shake-scene) と皮肉られているが、この文章は彼シェークスピアに関する最初の資料であり、当時即ち 1592 年の段階で、既に彼シェークスピアが世に有名だったことを皮肉にも後世に対して裏付けることになった。

4 .

一代の「風雲児」ロバート・グリーンの身近な友人の一人であり、彼と劇を合作したこともあるトマス・ロッジもオックスフォード大学出のインテリ作家である。

グリーンが田舎の町の馬具製造人の子と伝えられるのに対して、ロッジのほうは家柄はずっとよかった。彼の父トマスはロンドン市長になり、ナイト(騎士)位まで与えられた人物であった。子のほうのトマスは、初め、貴族の小姓になり、後、オックスフォードに入った。二十才の頃から文筆活動を始めている。だが、彼は、ローマ旧教への信仰に傾いた。こうして、投獄されたり、法律学校リンカンズ・イン(Lincoln's Inn)の学位を与えられなかったりするという不幸にも遭っている。パンフレット書きやカトリック信仰のこともあって、両親亡き後、廃嫡され、一門内の経済的な争いにも巻き込まれることになる。

グリーンらと同様にジョン・リリーの文体の影響のもとに文筆家としてのスタートを切ったロッジは、最初、スティーヴン・ゴッソン(Stephen Gosson, 1554-1624)の『悪弊の学校』(*The School of Abuse*, 1579)への反論たる『詩、音楽、並びに演劇の弁護』(*A Defence of Poetry, Music, and Stage Plays*, 1579)を書いた。ゴッソンの作品は、清教徒としての立場から、詩や演劇を攻撃したものであり、これに対する反論としては、シドニーの『詩の弁護』(*An Apologie for Poetrie*, 1595)のほうがかもって名高い。

ともかく、この後、ロッジは上述のように周囲の環境悪化により、文筆で活路を開く必要に迫られる。彼は幾つかのリリー流のロマンスや詩、それに劇作品(その中には、既に記した通り、グリーンとの共作も含まれる)を書いた後、代表作と目される『ロザリンド』を仕上げる。これも『ユーフューズ』の文章やシドニーの『アーケイディア』の影響を受けたものであるが、彼がカナリア群島に航海した結果生まれたものとされている。大体、ロッジは旅行家、冒険家として知られた。この作品もまた、それ自体傑作ではあったが、『パンドスト王』の場合と同様に、むしろシェークスピアの喜劇『お気に召すまま』(*As You Like It*, 1599-1600)の素材となったことで史上に有名である。

この後、ロッジは、『アメリカの真珠』(*A Margarite of America*, 1596)を含むロマンス、ソネットの流行に乗った『フィリス』(*Phyllis, Honoured with Pastorall Sonnets, Elegies, and Amorous Delights*, 1593)などの詩、パンフレット類などをいろいろものしている。更に当時活発だった翻訳の分野にも乗り出し、著名な『セネカ作品集』(*The Workes both Morall and Natural of Lucius Annaeus Seneca*, 1614)などの業績を残した。後年の彼は、フランスで医学の学位を取得し、ベルギー、そしてロンドンで医者として活躍し、疫病の流行などに対処している。この方面では『疫病論』(*Treatise of the Plague*, 1603)などを著わした。

ロッジの代表的ロマンス『ロザリンド』は、シェークスピアの『お気に召すまま』の下敷きとなった。『ユーフューズ』流文体の作品だが、本家の『ユーフューズ』よりずっと柔軟で垢抜けしているとみなされている。中世英国の韻文のロマンス『ガメリン物語』(*The Tale of Gamelyn*, 1350年頃)をもとにして書いたものである。ロビン・フッド(Robin Hood)

の話とも関係があるというこの『ガメリン物語』は、弟ガメリンが父の死後兄に追放されるが、ロビン・フッドのように森の中の一味を率いて、兄に復讐する物語である。これを発展させた『ロザリンド』とそれに基づいた『お気に召すまま』の両者の筋は大体同じである。但し、人物の名前が変えてあったり、筋の一部が、たとえばロッジにあっては、弟が実力で打ち勝つものに対して、シェークスピアでは兄弟の折れ合いに終る、というように、変更されていたりする。そういう違いがある。むろん、最終的、総合的芸術化の度合いにおいて、シェークスピアのほうがはるかに上手であるのは、これはもう致し方のないことである。

ロッジは、詩人としてもかなりの才能を持っており、幾つかの詩集も残したわけであるが、「ロザリンド」の中にも恋歌や牧歌が沢山盛り込まれている。そして物語の題材面のみならず、こうした詩の面でもシェークスピアに影響を及ぼしたことは明白であろう。ロッジの抒情詩はなかなか自然で練れている。彼は決してただの凡庸な詩人ではない。次に掲げるのは『ロザリンド』中の「モンタナスの恋歌」の一部である。

フィービは坐り、
美しく坐れり、
 彼女をながめしとき、美しくフィービは坐れり。
眉は白く、
目は恥じらいをふくみ、
 眉と目、いかに人をよろこばす！

われ言葉をついやし、
ため息を送るも、
 ともに^か甲斐なし。
おお、わが恋よ、
なんじの望みは果されず、
 ながむるのみにては、心の安らかさ得られぬためなり。
泉のほとりに
フィービは坐れり。
 泉のほとりに坐れるフィービを、われはながむ。
彼女の感触は甘美、
声はずばらし。
・・・

トマス・ロッジ『ロザリンド』(北川梯二訳)

更に、次の引用は本体たる散文部分の一部である。

太陽がアウロラの床から歩み出るやいなや、エイリイーナはガニューメデスによって目をさまされた。彼は夜じゅう眠らず、悶々の情の苦しみで寝がえりを打ち、もう時刻、野原に出て羊を小屋から出さなければならない、と伝えたのだった。エイリイーナは、

それと見当がついたので、ひとつガニメデスをからかってやろうと考え、こう答えた、
「まあ、腕白坊主^{わんぱくぼうず}さん！太陽はあがったばかり、まだイリスの豊かさはフロラの胸に抱かれてやすみ、フォイブスは真珠の露をまだ乾かしてはいけませんよ。コリドンにながいに教わっていることですが、羊を外につれだすのはよくないこと、露がよくなく、羊が肝臓病にかかってしまうのですからね。でもいま、古いことわざがほんとうなのがわかったわ、悪魔に追い立てられている者は急ぎ、恋につき動かされる者には、おくれが死よりもつらいということがね。ああ、小姓よ、お前の目には愛が、お前の心には情熱が、宿っているの？まあ、目には愛情をつつみ、恋心で思いすべてを燃え立たせているのね？いいこと、それは、エトナ火山の火のように、消すことのできない炎なのです。でも、自然の情は、その道を進まなければなりません。女の目は、黒玉のようなひきつける力と、ダイヤモンドのような保持力のあるものです。女性は、美しいものの楽しみにたわむれ、豹^{ひょう}の美しい皮にみとれ、豹が人間を食べるのを経験で知って、くやむのです」

「さあさあ」ガニメデスはいった「そんなお説教はまだ寝ていようとするごまかし言葉、・・・

トマス・ロッジ『ロザリンド』(北川悌二訳)

The sunne was no sooner stept from the bed of Aurora, but Aliena was wakened by Ganimedee, who restlesse all night, had tossed in her passions, saying it was then time to go to the field to unfold their sheepe. Aliena (that spied where the hare was by the hounds, and could see day at a little hole) thought to be pleasaunt with her Ganimedee, and therefore replied thus: "What, wanton; the sun is but new up, and as yet Iris riches lies folded in the bosome of Flora: Phoebus hath not dried up the pearled dew, and so long Coridon hath taught me it is not fitte to lead the sheepe abroad, least the deaw being unwholesome, they get the rot: but now see I the old proverbe true, he is in hast whom the devill drives, and where love prickes forward, there is no worse death then delay. Ah, my good page, is there fancie in thine eye, and passions in thy heart? What, hast thou wrapt love in thy looks, and sette all thy thoughts on fire by affection? I tell thee, it is a flame as harde to be quencht as that of Aetna. But nature must have her course: womens eies have faculty attractive like the jeat, and retentive like the diamond: they dally in the delight of faire objects, til gazing on the panthers beautiful skin, repenting experience tel them he hath a devouring paunch. Come on (quoth Ganimedee) this sermon of yours is but a subiltie to lie stil a bed, . . .

T. Lodge, *Rosalynde*

近代小説の先駆とも評される『ロザリンド』は、「エリザベス朝小説」中の最重要作の一つであり、リリー、シドニー系のロマンスものの中で第一級の傑作となっている。「エリザベス朝小説」の研究資料としてトマス・ナッシュの『悲運の旅人』と双壁をなすものと言っても過言ではあるまい。

そのトマス・ナッシュは国教会派の人物で、パンフレット作家としても名声を博したが、何と言っても、代表作『悲運の旅人』で広く知られている。彼はこの作品により英国ピカ

レスク小説の元祖としての名を残した。ナッシュと同作については、拙論『『悲運の旅人』
- イギリス小説の源流』(『都留文科大学研究紀要』第41集)を参照されたい。

5 .

既に挙げた作家たちはいずれもオックスフォードやケンブリッジ出身の「大学才人」であったが、トマス・デローネイ(Thomas Deloney, 1543-1600)はその経歴さえ明らかでない^{バラッド}民謡作者、物語作者であった。彼は民衆生活をリアルに描き出したことで特に注目される。

彼は多分ノーウィッチ(Norwich)に生まれたであろうとされている。絹織物工(silk-weaver)だった。1586年に結婚して、ロンドンに住んだという。後、旅まわりの「民謡屋」^{バラッド・モガ}をやり、民謡集もものした。その一方で、晩年、彼は3篇の写実小説を書いた。『ニューベリーのジャック』(*Jacke of Newberie*, 1597)、『立派な職業』(*The Gentle Craft*, 1597, 98)、『レディングのトマス』(*Thomas of Reading*, 1600)である。

フランスのルネ・ラルー(René Lalou)は、呉服屋や靴屋を題材としたデローネイは、団体作業を扱った作家の中では最も早くまた最も優れた一人だ、と評している。当時のやはり写実的な作家トマス・デッカーは、デローネイの影響を受けているようである。ウォルター・アレンはデローネイの作品を「粗野で、そのリアリズムは出来合いの粗雑なもので、文体は素朴で自然で率直」だと述べているが、とりわけ彼の想像力と表現力を高く買っている。

デローネイは、当時にあっては相当異色の作家ということになるが、彼の第一の特色は何と言ってもその大衆的な本質にあり、英文学史上において初めて平民庶民の日常生活を描いた点にある。こうした意味で、彼の小説は、未来を先取りした要素を持ち、18世紀小説に通じるような斬新さを備えていたということにもなる。彼は当時のロマンス界のルネッサンス的新流行の波の外側に立ってはいしたが、英国の市井人や彼らの生活ぶりを素朴で気取らず、リアルな文体で活写したのであった。

なお、『レディングのトマス』の内容には、シェークスピアの悲劇『マクベス』(*Macbeth*, 1605-06)のそれを連想させるところがあり、後者は何らかの形で前者の影響を受けたということも考えられる。もっとも、マクベスの物語自体は、ホリンシェッド(Raphael Holinshed, 1520頃-80頃)の『年代記』(*Chronicles*, 1577)にも載っているように、スコットランドの古い伝承である。

次の引用は、その『レディングのトマス』における、宿の主人と彼の妻君がトマス・コール(Thomas Cole)を殺害する場面である。あたかもマクベス夫妻がダンカン王を殺すような。

亭主とその女房は、この間ずっと彼の乱れた心に気をとめていたが、お互いにそれについて話し始めた。男のほうは、どうするのが一番いいか分からない、と言った。私も賛同して(と彼は言った)事を行うべきだよ。というのは、私は彼におせっかいをするのが最上の策だとは思わないのだからね。

一体誰が(と彼女は言った)今あなたの気持をくじいているのですか。あなたはこれだけのことをしておきながら、まだしり込みするのですか。それから彼女は、コールが

彼女の元に残した沢山の黄金を彼に見せながら言った。これを失っても心が痛まないのですか。あの年寄りのけちんぼうを絞め殺してしまいなさいな。あの男がこれ以上生きていても、どうなるというのですか。あの男は沢山持ち過ぎっていますが、私たちは貧乏です。あなた、思い切ってやって下さい。そうすれば、これが私たちのものになるのですよ。

彼女の邪悪な忠告は実行に移されることになり、二人が部屋のドアのところまで耳を澄ますと、男がぐっすり寝ているのが聞こえた。すべて大丈夫（と彼らは言い）台所へ下りていった。召使いたちはみな寝入っていた。二人が鉄製のくさびを引き抜くと、ベッドが落ち、男は煮え立った大釜に落下した。男が死んだので、夫婦は二人してその死体を川に投げ込んだ。衣服は処分し、すべてを自然のあるがままの状態にしておいた。しかし彼がコールの馬を運ぶために馬屋に来た時、そこの扉が開いていて、馬は逃げ出していた。

そして、馬丁たちが昨夜着けさせた端綱^{はづな}の一部と腹部の下のわらとともに、馬は裏手に出てしまっていた。そこは家に隣接する広い野原に通じていた。馬は強壯で丈夫だったので、いろいろな垣根を飛び越えて雌馬が草をはんでいるところに入ってゆき、その雌馬と一波乱あったので、二頭は街道に入り込んだ。町の人が見つけたが、その雌馬を知っていたので、雌馬の持主のところへ二頭を連れて帰ったのであった。

トマス・デローネイ『レディングのトマス』(筆者訳)

His host and hostesse, that all this while noted his troubled mind, began to commune betwixt themselves thereof. And the man said, he knew not what were best to be done. By my consent (quoth he) the matter should passe, for I thinke it is not best to meddle on him.

What man (quoth she) faint you now? have you done so many and doe you shrinke at this? Then shewing him a great deale of gold which *Cole* had left with her, she said, Would it not grieve a bodies heart to lose this? hang the old churle, what should he doe living any longer? he hath too much, and we have too little: tut husband, let the thing be done, and then this is our owne.

Her wicked counsell was followed, and when they had listned at his chamber doore, they heard the man sound asleepe: All is safe (quoth they) and downe into the kitchin they goe, their servants being all in bedde, and pulling out the yron pins, downe fell the bed, and the man dropt out into the boyling caldron. He being dead, they betwixt them cast his body into the river, his clothes they made away, and made all things as it should be: but when he came to the stable to convey thence *Coles* horse, the stable doore being open, the horse had got loose, and with a part of the halter about his necke, and straw trusted under his belly, as the ostlers had dressed him ore eve, he was gone out at the backe side, which led into a great field adjoyning to the house, and so leaping divers hedges, being a lustie stout horse, had got into a ground where a mare was grasing, with whom he kept such a coile, that they got into the high way, where one of the Towne meeting them, knew the mare, and brought her and the horse to the man that owd her.

T. Deloney, *Thomas of Reading*

リアルで分かりやすい文章だと言える。なお、この宿の主人夫婦は、コール以前にも大勢の人々を殺しており、彼らの悪事は露見してしまうことになる。

この異色なデローネイと同じように写実的な文人トマス・デッカー (Thomas Dekker, 1572頃-1632) は、劇作家として名をなした人物であるが、散文の社会記事も多く書いた。グリーンのようなパンフレット作家としても活躍したわけである。

デッカーはロンドンで生まれ育つたらしいが、詳しいことは不明である。貧乏に苦しめられた生涯であり、投獄されたようである。彼はロンドン商人を描いた『靴屋の休日』(*The Shoemaker's Holiday*, 1599) や『正直な娼婦』(*The Honest Whore*, 1604, 30) などに代表される写実劇を多数書いた。合作の多い多作家であった。ベン・ジョンソン (Ben Jonson, 1572-1637) やジョン・ウェブスター (John Webster, 1580?-1625?)、トマス・ミドルトン (Thomas Middleton, 1570?-1627) といった錚々たる劇作家たちと組んでいる。が、その一方で、デッカーは散文面でも健筆を振り、特にパンフレット作家として名を売った。彼の社会記事には、彼自身貧しかったがゆえに、下級社会を同情を込めて活写したものが多い。たとえば『驚異の年』(*The Wonderfull Year*, 1603)、『ロンドンの七大罪』(*The Seven Deadly Sinnes of London*, 1606)、『ロンドンの夜まわり』(*The Belman of London*, 1606)、『詐欺師のつの本』(*The Guls Horne-booke*, 1609) などがよく知られている。このうち『ロンドンの夜まわり』はグリーン『兎取り読本』(*Coney-Catching*, 1591-92) と同趣向のもので、下層社会のいかさまを暴いている。

このように、デッカーは、ジャーナリスティックな活動を示した。そこには後世のダニエル・デフォーを思わせるようなイメージが見てとれるのである。それゆえ、デッカーの文章はリアルで読みやすく、機知にも富んでいる。因みに、北川悌二氏は、パンフレット作家としての彼を「グリーンとナッシュの後継者、グリーンのやさしさと同情、たくましい創意を駆使したナッシュのふうを、ある程度総合して持っていた」と言っている。グリーン+ナッシュ=デッカーということである。ともあれ、デッカーをジャーナリズムの祖ともみなすことが出来そうである。

6 .

デッカーやグリーンらのパンフレット、デローネイの小説などに見られる現実社会に対する、市井一般に対する強い興味は、明らかに近代小説の本質に通ずるものを持っている。結局、近代小説の発生までは、このような現実志向の努力の積み重ねが必要だったということになるのであろう。

エリザベス朝の一群の散文ロマンス作家ないしはパンフレット作家 (両者は既に見たように同一の人物であるケースが多い) は、以上のように目覚ましい活躍ぶりを見せたわけであるが、この世界はアレンも言うように二つに分けることが出来る。一つは、シドニーの『アーケイディア』、グリーン『メナフォン』、『バンドスト王』、ロッジの『ロザリンド』、それにエマヌエル・フォード (Emanuel Ford) の『オルナトスとアルテジア』(*Ornatus and Artesia*, 1607) などの牧歌ロマンスの類、そして他の一つは、グリーンやデッカーらのパンフレットやデローネイの3篇の小説、それにナッシュの『悲運の旅人』などの写実的散文物である。そしてもちろん後者のほうが、近代小説との距離がずっと近いとみなせる。小説の歴史を考える場合、後者のほうが一層重要だということなのである。

だが、前者、即ちシドニーやリリー系統の散文ロマンス作家たちをも含むすべてのこうした分野の人々が彼ら個々として、また総体として、当時依然として未熟であった英国散文物語の形態と英語散文の質やスタイルの両面において、それらの発展のために多大な寄与、貢献をなしたことは明白であろう。